Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

中学生だって負けてない

東京都埋蔵文化財センター報 84

職場体験と埋蔵文化財

東京都埋蔵文化財センターでは、以前より多摩市、八王子市、町田市などの公立中学校からの依頼により、生徒さんたちの職場体験を受け入れています。一般企業等の会社社会と、ともすると閉鎖的になりがちな学校社会との連携を図るためや、生徒さんたちのこれからの進路を決める時の参考となるように、中学校が用意したいくつかの事業所（職場）の候補の中から、行ってみたい所を希望するシステムになっているようです。

それぞれの中学校によって、受入期間と人数には違いがありますが、当センターでは基本的には、2年生が2～5人で2～5日間に亘(わた)り、私たち職員と同じような内容の仕事を経験することになります。

◆

埋文センターの業務は、埋蔵文化財（遺跡）の発掘調査事業がその基盤であり主体ともなっていますが、最近では広報普及の事業も、かなりのウェイトを占めるようになってきました。そこで、職場体験に来られる生徒さんたちには、できる限り様々な内容の仕事を欲しいとの思いから、センターの近隣に発掘調査事業地区があれば、1日か2日くらいは発掘調査の体験を、その他の日には広報普及に関連した仕事も経験できるようなプログラムを組み立てています。

ところが最近、センターの近くでは調査地区がなくなり、残念ながら発掘調査の体験ができなくなっています。したがって、生徒さんたちが経験する仕事の内容は、自(もの)ずと広報普及事業の中での仕事になってしまう、という事情があるのです。

朝、仕事前の打合せ

いろいろな内容の仕事を経験してもらいたいので、同じ内容の仕事が2日続くことはありません。職場体験の受入等を担当している広報企画係の職員も、生徒さんと一緒に日々同じ内容の仕事をしながら、指導・監督にあたります。

体験教室の準備（勾玉作り）

体験教室の準備（勾玉作り）

◆

職場体験先の事業所として埋文センターを希望する中学校からの連絡をいただくと、いくつかの点について調整を行った後に、職場体験の日程や人数などが決まります。そこでその受入期間や受入人数、受入期間前後の広報関連行事予定などを踏まえて、いくつかのメニューをリストアップします。

粘土作り　初めは手捏ね

例えば、受入期間の直前や直後に体験教室が実施された、あるいは実施予定である場合は、その後片づけや教室開催の準備がメニューとなります。また、年間を通して行われる出前授業や火おこしマイスターなどで、消耗が激しい

粘土作り　仕上げは機械で

コンテナの洗浄

火きり板の作製

火きり板（火きり臼）の作製、「縄文土器作り教室」で使用するための粘土作り、展示する復原土器の石膏部分に色を塗る補彩作業、発掘調査で出土した遺物の水洗い、その遺物を収めるためのコンテナの洗浄・乾燥などは定番のメニューです。そして遺跡庭園「縄文の村」の環境整備も、今年度から新たな候補に加わりました。さらには、保存科学担当の協力により、江戸時代の遺跡から出土した木製品の保存処理作業も貴重な経験として、メニューに加えさせてもらっています。

他にも様々なメニューを用意して、その期間のプログラムを組み立てているのですが、どの仕事も普段の生活の中ではあまり経験しない、できないものがかなり含まれています。そして、たまに表舞台に出ることもありますが、そのほとんどが裏方の地味な仕事の積み重ねをしている、ということも経験します。

実際、生徒さんたちはどのようなメニューも初めて体験することばかりで、楽しそうに仕事に取り組んでいた姿が印象的でした。

◆

職場体験期間の最終日に、生徒さんたちにそれぞれの感想を聞いてみると、

「いろいろな仕事があってびっくりした」

木製品の保存処理作業（含侵槽からの取上げ）

「やったことのない事ができたのでよかった」

「意外とたいへんだった」

という言葉が多く聞かれました。

木製品の保存処理作業（拭取り）

特に、木製品の保存処理を体験した生徒さんたちは、日常生活において、まず経験することのない仕事ですから、始めから終わりまで興味津々の様子でした。

いろいろな仕事をやってみて、何がどうなっていて、これからどうなるなんていう理論的なことを理解してくれたかどうかは二の次でいいと思います。ただ、埋文センターに来ているからという理由で考古学というものに拘ることなく、これがきっかけで自分が好きなこと、やりたいことが見つかって、これから歩む道が見えてくるかもしれない、そんな機会であって欲しいと思うのです。

もしかしたら将来のノーベル賞候補になるかも、なんて思えたらとても嬉しいですよね。

これはどんな事業所、仕事でも同じではないかと思います。職場体験の期間中に、自分たちが希望したそれぞれの事業所へ赴き、その初日から自分たちが知らなかった世界がそこにあって、今、その世界の一部に触れている。近い将来こんなことをやってみたい、こういうことをもっと知りたいから大学にいって勉強してみたい、と思ってもらえたらとても素晴らしいことだと思います。

皆さんにも思い当たる事がひとつやふたつ、あるのではないでしょうか。どんなことがきっかけで自分の進むべき道が開けるかなんて、きっと本人たちも想定外のことなのでしょうから。　（並木）

「縄文の村」の環境整備

石器の「ツボ」　Vol. 9

石皿と磨石

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第９回。今回は、石皿と磨石です。

旧石器時代から縄文時代になると暖かくなりました。旧石器時代には針葉樹や落葉樹がまばらに生えていたものが、縄文時代になると照葉樹の森林が発達します。森林の発達とあいまって縄文時代には植物の採集が盛んになり、その方法と種類は豊富になります。特に森林から木の実やヤマイモなどの根菜を採集し、食用することが多くなったと考えられます。

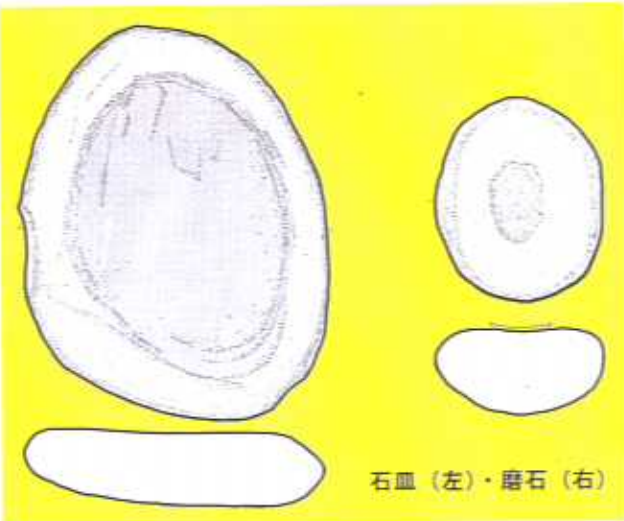
その木の実などの粉砕、製粉といった調理に使用したものが、石皿と磨石です。石を使って磨りつぶして粉状にするのですが、石皿と磨石はちょうど擂鉢と擂粉木の間柄に相当します。石皿は、大きくて扁平な柔らかい石を使い、地面に置きます。磨石は、手ごろな大きさの柔らかい石を用いて、手に持って木の実などを石皿との間に挟みこんで磨ります。両方とも使用した結果表面が滑々しています。粉状になったものをこねて焼き、写真のようなクッキーにします。粉状にするのは、木の実のアク抜きのためでもあります。

クッキーにした木の実などはそのまま美味しく食べますが、乾パンのように保存することもできます。縄文時代には、季節的に動物狩猟と植物採集を組み合わせ、保存技術を発達させ本格的に貯蔵を行い、調理技術を発達させて食料加工品を生産するなど、計画的な食料生産を行いました。石皿と磨石は、まさにそうした食料生産に組み込まれた道具の一つなのです。

一方、旧石器時代は定住していませんでしたので、こうした貯蔵や高度な食料加工をほとんど行いませんでした。そうしたことから、旧石器時代には石皿と磨石はあまり使われなかったと考えられています。

石皿と磨石の「ツボ」：石皿と磨石は木の実を磨りつぶす調理具です。自然に恵まれた縄文時代ならではの道具です。　（伊藤）

石皿・磨石を使用し調理してできたクッキー



多摩ニュータウンNo. 166 遺跡出土の石皿・磨石（縮尺 1/4）

石皿・磨石の使用例（石皿・磨石は複製品です）

カタログ
「縄文の村」の植物たち

分類：ニシキギ科ニシキギ属
マユミ
生態：北海道～九州
特徴：落葉樹。雌雄異株。
開花5～6月

マユミ
檀
（真弓）

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。これらの植物と縄文人とのかかわりについて、ご紹介していきたいと思います。

今回は「マユミ」という名前の植物をご紹介します。初冬の頃に真っ赤に色づいた実が美しく、葉がすっかり落ちた山野に最後の彩を添えてくれます。縄文人もその美しさに心奪われたのかもしれません。

しかしこのマユミ、観賞用としてではなく、縄文人の生活に不可欠な"ある道具"を作るために使用されていました。その道具とはズバリ"弓"です。

縄文時代早期から使われ始めた弓は、縄文人の狩猟技術を飛躍的に発達させました。弓矢の出現によって、より遠くの獲物や小型で動作の素早い動物をも狩りの対象にすることが出来るようになったのです。

木で作られていた弓本体が遺跡から出土することは極めて稀ですが、遺跡から大量に出土する石鏃（ごくぞく）が縄文人の弓の使用を物語ってくれています。

また、福井県の鳥浜貝塚や東京都の下宅部（しもやけべ）遺跡、青森県の是川（ぜがわ）遺跡などでは全体に漆を塗って装飾した弓も発見されており、単に狩猟の道具としてだけではなく、祭祀具としても使用されていたのではないかとも考えられています。まさに縄文人の生活に弓は欠かせない存在だったのです。

出土した漆塗りの装飾弓（下宅部遺跡）

現在の弓道に使用されている和弓は、竹や木を張り合わせて作られた合成弓で、中には反発力の向上のためケブラーやカーボンファイバーなどを使用しているものもあります。このような新素材はさておき、複数の素材を張り合わせた弓が誕生したのは平安時代以降とされており、それ以前の弓は一本の木を削り出して作った丸木弓でした。

この丸木弓、作ってみるとなかなか難しく、一度引くだけでひび割れてしまったり、簡単に折れてしまいます。これを防ぐためには、弓に適した樹種（じゅしゅ）や部位を選ぶ必要があります。遺跡から出土する弓の素材を調べてみると、イヌガヤが最も多く、他にマユミ、アズサ、イヌマキなどがあり、樹種に偏（かたよ）りが見られます。出土した地域や、遺跡の立地などを考慮する必要があるので断定は出来ませんが、縄文人もより良い弓を作るために、使用する材質を選択していたことが窺（うかが）えます。

上：マユミの木質部
左：色づいたマユミの実

実際にマユミを削りだしてみると木目が目立たず、とても均質な木質を持っているのが分かります。この木質が引いても折れないしなやかな粘りと、強い反発力が必要となる弓に適しているのでしょう。また、先ほど挙げた装飾弓にマユミが多用されているのも何か意味があるのかもしれません。

縄文時代以降もマユミは弓材として使用され続けています。漢字で「真弓（まゆみ）」とも表記され、伊勢物語の中でも【 梓弓（あずさゆみ） 真弓（まゆみ） 槻弓（つきゆみ） 年を経て　我がせしがごと　うるはしみせよ 】という悲しい恋の歌があります。当時もマユミを使った弓が広く知られていたのでしょう。

現在「縄文の村」の片隅にひっそりとはえているマユミはまだまだ小さくて花実をつけていませんが、いずれ大きくなって初冬の景色を盛り上げてくれることでしょう。（武内）

うちの嫁さんは10数本のイアリングを持っているが、私が買ってあげたのは1つだけなので、残りは誰からいつどうやって入手したものなのか謎。ただし、今回の問題はそこではなく、現代の成人女性ならそれくらいのアクセサリーは普通に持っているということであって、では縄文人はどうだったのだろうかということ。

縄文時代の代表的なアクセサリーに耳飾りがある。多摩ニュータウン遺跡では、これまでの発掘調査で前期（諸磯式期）の玦状耳飾り（けつじょうみみかざり）と呼ばれる石製の耳飾り26点、中期の耳飾り（耳栓）70点が発見されている。800ヶ所近くの遺跡を調査してこれが全てということになるが、果たしてこの数字は多いのか少ないのか。住居跡の数と比較してみよう。

前期（諸磯式期）の住居跡は、これまでに60軒見つかっている。単純に1軒に6人住んでいたとして360人。出土した耳飾りは26点、しかも耳飾りは2点で一対だとすると13セット。単純に計算して28人に1人しかしていなかったことになる。同じく中期の住居跡は800軒以上発見されているので、100人強で一人くらいの割合ということになるか。いずれにしても住居数に比べると装飾品の数そのものは断然少なく、かなり限られたものであったことがうかがえる。しかも不思議なことに、このうち確実にお墓から出土したもの、つまり埋葬される時まで装着されていたものは、№753遺跡から出土した写真の玦状耳飾り2点のみで、他は壊れた土器などとともに捨てられたような状態で発見されている。

どうやら縄文人のアクセサリーは、いつでもどこでも誰でもがチャラチャラと付けていたものではなく、しかも死ぬまで一生身に付けていたものでもなく、限られた人が、限られた時にだけ身に付けたものであったということになろうか。そういえば、現代でも限られた若者と御婦人はしているが、年配の男性はしていないのと同じ？。

さらに、今回多摩ニュータウン遺跡群の玦状耳飾りの出土状態を改めて調べてみたところ、住居跡の発見された遺跡である集落からは1点も発見されていないことが明らかになった。つまり玦状耳飾りは日常生活を営んでいた場所以外でしか発見されていないことになる。これは一体何を意味しているのか。ひょっとすると集落と墓域がはっきりと分かれていたことを示しているのか。いずれにせよこれは今までまったく指摘されてこなかったことで、今後耳飾りの出土状態には留意する必要がありそう。

装飾品と年令・性別の関係はどうだろう。限られた数少ない人骨の装着例からのみの判断となるが、例えば耳飾りは男性も付けているが成人女性が多く、腕輪は女性専用、首飾りは男性が多く、腰飾りは男性専用のアイテムという傾向が指摘されている。長野県の北村遺跡では5体の男性人骨に伴って、イノシシの牙の装飾品が発見されている。その彼らが装飾系縄文人と呼ばれていたかどうかは定かではない。

ところで、縄文時代に流行った耳飾りも、なぜか次の弥生時代には引き継がれることなく廃れてしまう。その訳を我が家の家族が物語ってくれる。うちの嫁さんは、古モンゴロイド系の縄文顔で、彼女の耳たぶは広くて大きく、合わせて態度も大きい。一方私は、典型的な新モンゴロイドの弥生顔で、耳たぶが狭くて小さく、態度も小さい。この耳たぶの大きさの違いといった縄文から弥生の形質人類学的な変化が、耳飾りを消失していった原因ともいう。もちろん態度の大きさは別問題。一応念のため。ただし、この説どうも耳つば、いやマユツバ臭い。というのも、次の古墳時代になると鍬をかついだ農民も耳飾りをしていることが、埴輪から見てとることができるからでもある。

その後耳たぶに穴をあける文化はすっかり忘れ去られ、みたび現代若者によって復活することとなるが、「みてみて、このピアス超カワイーイー。」と縄文人が言ったかどうかは知らない。　（小薬）

当センターの展示施設の一つに、大きなガラス窓の内側にたくさんの縄文土器を並べて収納と展示を兼ねたコーナーがある。初めて訪れた見学者の多くは、このガラス窓の前で思わず足を止め見入る。そこには何の解説もなく、ただ土器が年代順に並べられただけにもかかわらず。

何千年も前の縄文土器が大量に目の前にあることに対する驚き。そしてそれ以上に縄文土器そのものが持つ圧倒的な驚異に多くの人が魅せられる。モノそのものに力があれば、そこには何の演出もいらない。縄文土器そのものが持っている力は、自然と見ている人に驚きとして伝わるが、さらにこの縄文土器の持っている力を引き出し、それを正しく伝えること、ここに展示の原点がある。驚きは知識を得ることによってさらに感動へと変わる。

私たちは、果たしてこの多摩の縄文土器の力を正しく伝えられているのだろうか。展示とは単に並べて飾ることではない。現在の窓から過去をのぞき、その過去から再び現在を見つめ直すための装置、それが展示でもある。

ただし、いくら立派な展示をしても、所詮そこには展示としての限界がある。それを補うものは、見学者自らの経験と体験以外にない。展示では、見学者が縄文土器を直接手で触れることができるよう露出展示としてあり、できる限り触れてもらうようにしている。壊れるリスクよりも感じる体験を最優先する。さらに実際に縄文土器を作ってみる。火おこしの体験をしてみる。縄文人の使った道具で縄文食を作って食べてみる。これらの体験が展示と一体になった時、その装置はさらに威力を発揮する。

5000年前、1万年前というと、とんでもなく遠い昔のこと、自分とは何の関係もないことのように思われる。でも、今ここにある縄文土器を前にして、同じ人間として一生懸命生きていこうとした縄文人が作り使ったものであることを、直接肌で触れることによって、縄文人そのものを身近に感じることができた時、それは単なる遠い昔のロマンだけではなくなる。

土器をつくる技術、火をおこす技、四季の変化の中で自然と共に生きようとする力。どれも縄文人が一万年かけて育んできてくれたもの。人間が生きていく上で必要なそして極めて基本的な力であり、技であり、知恵でもある。

複雑化した現代社会ではなかなか見えにくくなっているかもしれないが、それを意識しようとしまいにかかわらず、それは現代に生きる私たちの日常生活の中にもしっかりと受け継がれている。まさに、縄文という根っこの上に今の生活があり、現代社会の礎となっている。

この縄文人の力を知る時、初めてロマンは次の世代へのメッセージとなる。生きることに今も昔も変わりはない。縄文時代を見て、見つめて、見極めることによって、人間の基本が見えてくるような気もする。

「あっ、縄文だ！」を今年度の展示テーマにした所以でもある。

そして、そんな機会をより多くの人に展示と体験を通して伝えることこそが、埋蔵文化財センターの役割そのものでもあるといえる。40年の歳月をかけて多摩の縄文を発掘してきたもの。そしてそれは1万年の歳月をかけて育まれたもの。これを私たちは正しく伝えることができるのかどうか、今改めて問い直されているが、それをできるのは埋蔵文化財センターを措いて他にはない。

この可能性とこれからの更なる発展とを期待して、「多摩の縄文　アらかると」の最終回とさせていただきたいと思います。永い間ありがとうございました。またいつの日か縄文の世界でお会いできることを楽しみにしています。

それではまた。縄文なう。　（小薬）

収蔵庫から

「温石（おんじゃく）」をご存知ですか。「滑石（かっせき）」という石のことを「おんじゃく」と呼ぶ地方もありますが、考古資料のそれは携帯懐炉のことです。寒い冬の日、屋外で活動する際に欠かせないものの１つに「ホッカイロ」があります。年配の方なら「ハクキンカイロ」の方が懐かしいかもしれません。温石は、これら暖房具の“ご先祖様”にあたる遺物です。

温石の盛行する時代は、古代末から近世にかけてです。温石の使い方から推測すると、寒い地方にほど濃密に分布しているように思えますが、実際には全く違います。全国的に見ると九州から東北にかけて発見されていますが、沖縄と北海道には見当たりません。沖縄はともかくとしても、北海道にない理由は、温石が単なる暖房具ではないことを暗示しています。

温石が複数出土した遺跡は、中世では福岡県の大宰府と博多、大分県の豊後府内、広島県の草戸千軒、京都府の宇治と京都、神奈川県の鎌倉、岩手県の平泉など。近世では大坂・名古屋の城下町や京都でも出土していますが、半数以上が江戸に集中します。つまり、温石がまとまって出土する遺跡は、当時の都市的な様相を持った特定の遺跡に限られているのです。これは、温石を保持していた人々のあり方と無関係ではないでしょう。

このような特殊な一面を持った温石が、多摩ニュータウン遺跡群でも№271遺跡と№391遺跡の２ヶ所で出土しています。いずれも今から２０数年前の調査で見つかった遺物ですが、当時は正体不明の石製品として報告されたものです。

№271遺跡出土例（写真右側）は、滑石製の石鍋を再生して温石に作り直したものです。時代は中世に比定できます。№391遺跡出土例（写真左側）は、石質が不明ですが、遺跡の時代から判断すると近世のものと考えられます。どちらも他地域からの搬入品です。おそらく、№271遺跡の温石は中世に鎌倉から、№391遺跡のものは近世に江戸から持ち込まれたものでしょう。

発掘した時にはわからなかった資料でも、研究の進展により正体が判明した好例の１つです。（小島）

右が№271遺跡、左が№391遺跡で出土した温石

ご好評につき、開催決定

縄文ワクワク体験まつり

勾玉作り　クルミ割り　輪投げ　スタンプラリー　石器作り　火おこし体験

月　日：平成２３年５月３日（祝）・４日（祝）
時　間：１０：００～１５：００
会　場：東京都埋蔵文化財センター　遺跡庭園「縄文の村」
お申込：不要　当日受付

「たまのよこやま」の由来　万葉集巻二十 之 四四一七 の 防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」（中臣部黒女）　を由来としています。

たまのよこやま 84　2011年3月31日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/